〝編集後記〟

本号は近代文学の特集となった。この企画に協力し、稿を寄せられた諸氏に感謝する。『同志社国文学』は、ここにはじめて近代文学の特集を編むことになったのである。

本号が完成するころ、安永武人先生が定年で退職される。時の流れとはいえ、同志社大学の国文学専攻の創立にかかわられた先達を、今年もまたお送りすることになるのである。同志社における近代文学研究の基礎をつくられた安永武人先生の足跡は大きい。講義や演習を通して、先生の学問と人格を敬慕してやまない人たちが、本号に稿を寄せられたのである。これからの同志社の近代文学研究は、本号の執筆者たちとその後輩が継承することになるだろう。

私事にわたることになるが、私がはじめて先生の謦咳に接したのは、もう三十年も前になるだろうか。そのころの忘れ難い印象を記しておきたい。

昭和三十年前後の晩秋であったかと思う。私はすでに安永先生に親しくさせていただいていたが、当時、先生は、小野十三郎氏が校長をしておられた大阪文学学校にも、幾度か出講されていた。私は何かの用事があって、先生と大阪文学学校でおちあう約束をした。まだ大阪文学学校は独自の教室や設備を持っていなかったころで、法円坂の大阪市教員会館の一部屋を借りて開講していた。日の短い夕方の、もう暗くなりかけた教員会館の廊下から、文学学校の教室にあてられた部屋に一歩入ったとき、私はそこの粛然たる空気に圧倒された。すでに先生の講義は始まっていたのである。教室のなかの七八十名の年齢もさまざまな聴講生は、ただ一つの姿を追い求め、ただ一つの声を聞こうとしているのが、私には直ちに理解できた。先生は田宮虎彦の『足摺岬』について講義されていたが、時に発せられる質問に聴講生が示す反応も気持がよかった。薄暗い電燈の下で緊張した時間が経過していったが、またそれは親密な雰囲気につつまれた空間でもあった。何時の間にか、私もまた、ただ先生の声と姿のみを追っていたように思う。あたかも古びた写真がそうであるように、このときの情景は、今もなお、私の脳裏に懐かしく焼き付けられている。先生の名講義については、大学で受講した多くの卒業生が語っている。私は大学の外の一教室で、偶然にもそれに遭遇する幸運に恵まれたのだ。

何年か経って、私も教壇に立つ身になった。大阪文学学校のあのときの情景が、私の教室の理想としてあるが、ついにいまだに及ばない。非力を痛感するばかりである。

昨冬、安永先生は『戦時下の作家と作品』（未来社）を上梓された。所収の御論文は、「戦時下の文学」と題されて本誌に掲載され

ていたものであり、多年にわたる資料の博捜と緻密な分析による御研究がまとめられている。そして同書からうかがわれるものは、「あとがき」にも詳しいように、戦後を一貫してこられた先生の厳しい姿勢である。

先達が去られることは淋しい。しかし同志社を去られた後も、安永先生は戦時下の文学についてのお仕事と、平和と教育の運動に積極的に参加すると私に話された。

「死と生とをわけたのは、まったく〝偶然〟でしかなかった」（同書「あとがき」）戦時下が、先生の固執すべき「人生」であったとすれば、擁護しなければならない平和と教育への運動に参加することが、先生のこれからの「人生」になるのだろう。

安永先生は、新たなる出発をされようとしている。惜別の思いに耐えないけれども、本号執筆の諸氏をはじめ、安永先生の薫陶を受けた後輩とともに、先生の前途を祝して乾杯しよう。

（玉井敬之）

執筆者紹介

田中励儀……松蔭女子学院大学専任講師
堀部功夫……池坊短期大学助教授
内田　満……平安女学院短期大学助教授
水上　勲……帝塚山大学助教授
北川秋雄……八日市高校教諭
岸　健治……平安女学院中・高等学校教諭

同志社国文学　第二三号

昭和五十九年三月一日　印刷
昭和五十九年三月一日　発行

編集　加美　宏
発行　同志社大学国文学会
（代表）
京都市上京区今出川通烏丸東入
振替　京都二七三七
印刷所　共同印刷工業株式会社
京都市右京区西院久田町